



橋 戸

令和3年11月29日
学校だより 第8号
練馬区立橋戸小学校
校長 青木 俊哉

厳しい年だからこそ…!!

校長 青木 俊哉

音楽会翌週の放課後、ふと校庭を見ると、何人かの6年生が集まって何やら話をしています。しばらくすると、走り出す子、ストレッチのような動作を見せる子、後から仲間に加わる子…様々です。そのうちにバトンを持つ子が現れ、リレーの練習のようです。興味深く感じ、校庭に下りて声をかけると、「高学年リレーの自主練習」とのことでした。

さて、今年の体育学習発表会の“目玉”の一つは、高学年リレーの復活でした。5・6年各クラスから男女4名ずつの選手、狭き門を通った子供たちの力走にご声援を頂きました。感染対策が求められる教科体育の授業、発表会の練習も、音楽会の練習と併行して練習期間が始まり、校庭にラインは引いたものの、高学年リレーも表立って動けぬ期間が続き、音楽会終了後の2週間、顔合わせを含め数回の練習枠、例年に比べ明らかに練習時間の少ない中での取組を余儀なくされました。そんな中見られたのが、冒頭に記した“6年選手たちの自主的な動き”です。

放課後、最初は5～6人、徐々にメンバーが増え、集まった選手たちで、準備し、走り込み、バトンパスの練習…。特定のチームの特訓のようではなく、学年全体がレベルアップしていくように見えました。職員室までバトンを返しに来る時のどこか誇らしげな表情や日ごとに自信を深めていく走りを見て、嬉しくなったものです。予め用意された練習時間には、6年から5年へとチームをリードする姿も見られ、下級生に広がる可能性も感じる程でした。誰かに言われて取り組むのではなく、自分たちで考えて、声を掛け合っただけの自主練習、本番前日の夕方まで続くこの光景は、まさに“主体的な学び”の姿と言えます。コロナ禍の厳しい練習環境が生んだ“価値ある姿”とも捉えることができます。

体育学習発表会本番、全校での勝ち負けはありませんが、リレーは順位がつきます。勝てば嬉しい、負ければ悔しいのは当然の心理ですが、レース後に選手たちに声をかけると、1周走り切り、バトンをうまくつなげたことへの満足感が感じられる表情で答えてくれました。主体的な自主練習への取組を通して得たものがきっとある…と確信しました。

昨年から今年にかけて、全校での取組や異学年交流の機会が極端に減り、高学年らしさをどのように身につけさせたらよいか、担任も子供たちも、悩み、模索してきました。従来のような機会はなくとも、何かできることはないか、できる方法はないかと考え、実行してきたのが、昨年と今年の6年生です。今回、こういった姿で成長の一端を見ることができ、感動を覚えました。もちろん、選抜された選手だけに限ったことではなく、様々な学年全体の場面で、成長を感じます。体育学習発表会の後も、NHKメディアリテラシー教室、ようやく始まったレインボー班のリーダー、そして明日出発する下田移動教室…、6年の取組は休みなく続きますが、最高学年が見せる意欲的な動きややり遂げた表情は、確実に全校に波及し、良いものを残します。“いい波”が来ていることを、実感できるこの頃です。

校庭にラインを引くと、その翌日には“何も言われなくても”トラックを走る子供たちの姿が見られます。不思議なことに、いつの時代でも、どこの学校でも…。子供って、ラインを見ると走りたくなる性質をもっているのでしょうか。“こんな準備(仕掛け)を教室の学習でもできないものか…”、多くの教員がこんなことを考え、悩み、実践しているのです。